













La Sorcière au Corbeau



聆る

よきのうららし



自らを嗤ふ歌

(一九〇八年—一九二〇年作)

わが心こころまたあらたまるよしなきか路みちに死しにた
る人ひとのたぐひか

われを見る鬨どくろの目めより流ながれたる涙なみだとばかり
白しろき朝あさかな

行方なき人と云ふこそ悲しけれ天つしら鳥飛
ばましものを

二

わが性は女の如しかりそめのひと言にしも目
の濡れにけれ

膝の上にしら鳥の羽をむしり居ぬわが目にう
つるまぼろしの人

與太郎が失物をしておどろけば目尻さがりぬ
よみこぶが如

事よろづたのしき方にとりなしぬ遊びを好む
みづからのため

この男みづから立てし掟をも變へがたしとは
思はざるかな

三

よろこべど下安からすひと時に三たびをの
く戀もするかな

四

しら鳥の子はいづち行く手弱女の手にありし
かごまた海に行く

かなしみは我れを求めて得ざりつるうつろに
立ちぬしら雲に似て

身の細ること女にもひとしくて憂しと詫ぶな
りこの人の常

蠟石を敷きたる圓き硝子室に蘭を移すもわれ
を嗅ぐため

病むときに飯場の子等が嘗むと云ふだいなま
いとかが我が吸ひし人

五

舞姫と踏みし河原をたもかげに月見草さく夜
となりしかな

六

群青の海のうねりのかたぶけば白きつがひの
鷗ながるる

この日まで捨つべき戀にかかはりぬわれの不
覺か君の不覺か

酒がめをくつがへさずば酒盡きじ君を捨てず
ば君を忘れじ

君もまたわが見ることを遮りぬ心に早くうす
ごろもして

ここちよき蘆のみどりと石竹の紅をまじへて
笛の風吹く

七

あけがたの薄あかりをば吸ふと見ぬ君が夢よ
りさめし少時

をりをりに悪寒の如く身を噛むは悲しく惜し
き夢の名残か

別れをば惜む友にも文書かず遠き流離の國さ
して行く

思ひ出でて一人ふたりや歎くらんしら菊さけ
ばわが旅のため

君が髪切れて赤くもなりゆくか孔雀の羽のお
とろふる如

俵より小豆なんどのこぼるるも港は悲し神無
月きて

垣かきのそとうす紫むらさきにたそがれて砂丘しゃきゅうをのぼる飴あめ
色の月いろのつき

一〇

わきまへも無なく一時ひとときに身みを噛かみぬ酒さけのたたり
と戀こひの憂うれき果は

二に三人さんにん紅あかく染そめたる豌豆あずきをはぢきはぢきに取とれる小ちひ
き舞まひ姫ひめ

末まへなりの隠か元げん豆まめのちさき實みに隣となりて白しろきそこ
はかの花はな

冷ひやたくも花粉はなごをつけて水盤すいばんの銀ぎんのふち這はふ秋あき
の蜂はちかな

思おもはじな輕かろはずみとも漫みたりともわが事ことは皆みなわ
がおのづから

一一

伊弉册のほぞの下なる裂目より母を焼きつつ
出でし迦具土

二三

温室の緑青つきし掛け金をはづせば香る初秋
の風

箱形のゐざり車のかたことと揃はぬ音の止ま
る橋詰

とくだみの風にまじりて子を下さ悪婆の笑ひ
ちらと黄いろし

夜の如しまた喪の如し十日ほど君の心を失ひ
し家

語るこそ歌舞伎のうはさ世の流行ただ其れな
がらにくき眼差

一三

君が馬車二月の森にとどろけば枯木をすべる
雪のかたまり

一四

秋は來ぬ二王の開く手の如きやつでの葉さへ
萎れ初めつつ

身も瘦せて女の如しいらいと忙しき心われ
や何ゆる

灰色の岩に上りて灰いろの海馬のごとく海を
窺ふ

倒れたる粉引小屋の下に泣く野分の朝のひま
はりの花

たそがれの暗き障子にさと光り過ぎゆく秋の
黄金のよそほひ

一五

青みつつ何見つむるや故知らぬ寒き涙を内に
見つむる

一六

黄金をもて塗れと言はましふるさに君を思
ひて倚りし板壁

鐵縁の眼鏡をはづしさびしくも痒き目を擦る
秋の夕暮

曇る夜に狐の啼くもなまめかし色街の灯の川
を照せば

ひがし山ちさき氣輕の舞姫は走りて撞きぬ大
佛の鐘

俵をば腰に巻きたる渡し場の女乞食も夕焼を
見る

一七

うす白くわが魂は目をあきぬ古き窓より逃れ
んとして

一八

鴉片より覺めたる人のぼやけたる面に冷たき
屋根うらの秋

かの男かの女として指ささる清十郎の戀ならね
ども

南座の繪看板をば舞姫と日暮れて見るも京の
ならはし

圓山の高き左阿彌の欄をば撫でつつ君の恨み
つること

清水の塔の下こそ悲しけれ昔の如く京の見ゆ
れば

一九

岡崎やわが家の跡の根葱畑に瓦のかけを濡す
霧雨

秋かせに薄白粉の歎くてふよりどころなき思
ひ倣しかな

まぼろしにうす紅梅の細帯を見る男こそうら
さびしけれ

静なる銀のかんざし睡蓮を摘まんとすれば水
にすべりぬ

山をとこ戸板に乗りて打黙し飯場に歸る白き
有明

すてばちに荒く物言ふ癖つきぬ何に抗ふ我れ
にさからふ

何事を待てるか誰を頼めるか問ふ聲ありてそ
の答無し

幾たびかあと戻りする足つきは我が眺めても
みぐるしきかな

灰をもて灰に抛つわが事の空しきを以て空し
きに泣く

煮え沸ぎるちよこれねとをば吹きながら女も
言ひぬ遣瀬なしやと

君に問ふ我れみづからを知り盡すみの業病を
何に癒さん

美しくしき夢をちかたの世となりぬ白けたる墓
目路に入りきぬ

青き湯の菜の香を立てて煙りつつ流るる溝に
猫柳咲く

大幅の友禪を取り白き手の尺あつる時黄金の
風ふく

今日にして思へば我の悪しき名もかにかく人の
真似がたくなりぬ

君の着る萌葱むらさき茜ぞめそを背にしたる
春風ぞ吹く

錫とけて坩鍋に鈍く光るごと重くものうき夏
の日のわれ

東京のあつき八月くちなはの鱗のごとく光る
八月

青^{あお}みたる薄^{うす}きころもを慄^{おそ}はせて赤^{あか}松^{まつ}の木^きにか
なかなの啼^なく

唇^{くちびる}も石^{いし}をば骨^{ほね}むるここちしぬ歡^{よろこ}び早^{はや}く身^みを去^さ
りにけん

急^{いそ}がしく暑^{あつ}きといきを投^なげかけて女^{をんな}の如^{ごと}く夏^{なつ}
のとりまく

あきらかに底^{そこ}の見^みゆるはあぢきなし我が歡^{くわん}樂^{らく}
は水^{みづ}に似^にるかな

身^みを曲^まげて水^{みづ}を見るごとといきしぬ暗^{くら}き心^{こころ}に
死^しを思^{おも}ふ時^{とき}

うす青^{あお}き虎^こ杖^{じょう}の酢^すと錫^{すず}に似^にるとんぼの羽^はと痛^{いた}
き夏^{なつ}かな

不思議なる Pisa の斜塔かわが心しづかなる日に
黒く傾く

神經の棘の木立を踏みにじり悪の力は自動車
を驅る

願ふこと世の常こえて多き人厭ふ所もまた多
きひと

秋のきて病める蠶の透きとほる身の悲しみを
我れも知るかな

銀錢の薄きを落す敷石に酒の香を吐くしろ百
合の花

背中をば寒くかがめて下向きぬ歌思ふ日も泣
きし日の癖

さびしかるねちけ心は人皆の歡ぶときにかた
はらに向く

美しくしきねちを忘れてわが上に打黙したる灰
色の時

もみあげを短く剃りし歌なども不抱が詠めば
涙さそひぬ

濠端を過ぎたる馬車の金の紋目に残りつつ霧
の晴れゆく

君が著る御納戸色と横に降るしろき雨とを
づる長椅子

縣廳の Dome の横を白く刺し短劔のごと光る夏
かな (以下二首千葉にて)

三五人干潟を踏みて物言ひぬ涼しく暮るる海
明りかな

あさましく飢ゑし獸に身をかりぬ己れを噛み
て慰まんため

われの齡やや長け斯かる朝を愛づ靄の中なる
藍色の山

毛を垂れて骨出でし馬三つばかりわが門過ぎ
て冬の日に入る

冬木立むらさき薄く引く中に銀をなげうつ鶉
の笛

荷ぐるまの鐵輪の觸れし痕つける土手も凍り
て土のこぼるる

三四
枯れし木に片手を掛けて冬は見ぬ骨もて積の
る白き切崖

花のまま枯れて黒める山あざみ二尺の莖に淡
雪の降る

けうとしや老木の桑の黄ばみたる枝に上りて
野の鮎啼く

わが馬の息に觸るれば蔦の葉も櫛も散りぬ赤
く悲しく

青白き萩の葉風にひろき野の入日の朱をば消
して降る雪

石土手に身をのしかけて物言ひぬ赤き傘さす
船の少女と

青やかに二月の朝の海明けて赤き切崖雪をい
ただく

三六

いなづまに髪青き鬼乗りて馳せ無邊に投ぐる
白き髑髏

よろづ世に白くさびしき身と知りて刹那を染
むる紅き杯

わが問へる事に違ひしいらへをば寒くつれな
く天地はする

片隅の卓にはなれしかの人も寒くやあらん前
のさかづき

しばらくは君が髪をばまさぐりぬ舞臺の上の
若人の如

三七

わが前に紅き風吹きやつくちのそよげば見ゆる
白き片肘

三八

ちりめんの赤き襦袢の片袖と船とを映し霞み
たる水

加茂川も四條の橋にいざよひぬ別れがたしと
君の泣く時

赤き鳥なに驚くや鳴きさしてわれの夢よりを
ちかたに逃ぐ

杯の下さかづきの陰影かげにもおどろきぬかの怨む子の髪
の端かと

木ずるよりこがねの薄を切りて撒きその老顔を
を隠す霜月

三九

冬くれと短き衣のあはれなるわが娘等は膝の
あらはる

妻を見て寒く笑ひぬ貧しきは面を合せて泣く
暇も無し

太やかに曲るばいぶを啣へつつ顔を擧めて組
める後手

衣朽ちてほの露るる子の肩を干潟に白き貝と
云はまし

溜りたる水をめぐりて草の芽の青めば枝に紅
き梅さく

蠟燭を誰が家よりか啣へきて棟にとまりぬさ
びしき鴉

うす赤く青く野火もね枯草を打ちて光りぬ長
き柄の鎌

かれがれの甲斐の葡萄を手に採れば細き莖よ
り白露の泣く

野を焼ける名残のけぶり庭に入り這へばしづ
くすわが檐の霜

實の黄ばむ橙の樹に鶏を追へば上りぬ山里の
ごと

つぶつぶと泡立つ水を底に聞く魚のたぐひか
倦めるたましひ

わが爲にわかきうぐひす花に来てわが失ひし
たましひを喚ぶ

この苦き李は身をば傷へどかの嘲りを聞くは
我がため

四四

わが行手しやぼてんに似る棘の木の藪を作る
も人と異なる

わが瘦せしうしろ姿を見る如し水の明りに立
てる馬蓼

さかづきの小きを舉げて蟹の肉の白きを噛み
ぬわが瘦のため

秋たけて圓く胡粉を盛る如き菊は咲けどもわ
れ瘦せてゆく

砂丘をば筑紫の旅に踏む如くこころ白けて秋
風に泣く

四五

衰へて身を隠すべき菅笠を清十郎に借らんと
ぞ思ふ

四六

われもまた痩せて舊りゆくあはれあはれ明日
を思へば涯なきものを

葛もて組みし筏の流れ去り濁れる沖に白くた
だよふ

山かげの葛の根をば食む如く乏しき我れを食
みて痩せゆく

山城に木の芽つむ日となりぬれば隠れて母と
泣きし夜おもほゆ

おもしろく友みな攀ぢぬ降りゆきぬここの切
厓そこの切厓

四七

四八
こころよく柳の霧にぬれそほち濠端をゆくあ
かつきの馬車

黙したる四十路の戀の苦しきは啞の少女のた
ぐひなるかな

骨などを叩くが如き音ぞする早くも我れや枯
れしなるらん

傍らの香水をとり口そそぐまた明日の日を歌
はんとして

われ未だまことに人を喚らせずその證にはよ
き敵なし

花 緑濃き愁つるのび桃色の涙を流すいんげんの

五〇
撞き止みし青き木間の釣鐘のしばらく動く夏の夕ぐれ

木の音の三味にまじるも心地よし歌舞伎に近くわが遊ぶ家

被きたる水色の藻を脱ぎ放ちわが手を執りて物を言ふ魚

ニコライの塔に西日の落つる時小暗くなりて涼風ぞ吹く

かたはらに少し酔ひたる女の目さく花よりも何よりもよし

さかづきを手ごとに執りて一人の貴女をば繞る酔のたはぶれ

われと我が病みて動かぬみにくさは砂なる魚
の心地するかな

五二

みづからを幼児のごといたはりぬ猶あたらし
き日に行かんとて

女ある障子のなかの灯の如し秋ふけて咲くだ
ありあの花

相いだき海嘯にさへも巻かれんと事を好める
戀がたりかな

藝術と女とわれの生涯はかの岸に行き此岸に
寄る

いと疾くもわがたかぶりを失ひぬまた何を
て何に勝たまし

五三

海を見^みて歎^{なげ}くと云^いはば嗤^{わら}はれんわれの行^ゆ手を
されど歎^{なげ}けり

五四

一^{ひと}しきり窓^{まど}の硝^び子を焼^やきこがしカンナの花^{はな}に
日^ひの暮^くれてゆく

美^うくしき囃^はばかりを耳^{みみ}にして脱^ぬ殻^{がら}に倚^より灰^{はい}色^{いろ}
を嗅^かぐ

わが時^{とき}は失^うはれたり涙^{なみだ}もて築^ききしものぞすべ
て流^{なが}るる

こころよくけろりと落^おちし瘡^{かさ}さへ程^{ほど}を經^へぬれ
ば少^{すこ}し悔^くしき

ひややかに酒^{さけ}のやうなる香^かを放^{はな}つ秋^{あき}の雨^{あま}夜の
そこばくの花^{はな}

五五

あさましく我れをいたはることをせず命を刻
む唯飽かんだめ

五六

いたづらに欲おほき身を繋がんと病は寒き岩
をもてきぬ

わが上にわが待てること限なし必ず來るは悔
と知れども

しら露を秋かせ吹けば蟪蛄も青きころもを擴
げつつ飛ぶ

光れるは海月か露かうろくづか村雨過ぎて夜
となりし砂

君を見る初めての夜にきみわろく我れを睨み
し棚の黒猫

五七

賢かしこきはあはれいたまし木の根ねにも牛うしつまづか
す人のつまづく

五八

石白いしびやくのもとに藁わらもてしばりたる蕪かぶらの光ひかりる薄月うすつき
夜よかな

うす赤あかく橙染だいだいぞめみてしら糸いとに似にる菊きくさけば初雪はつゆき
の降ふる

ぬれ紙がみを張はりたる如ごとくなまぬるき雨夜あまよの空そらに
のぼる薄月うすつき

天地あめつちにいまだならばぬ疚いづましさを少すこしくおぼゆ
わが戀こひのため

十とあまり三みとせ經へぬればそのかみの放逸はういつの子
も父ちちを思おもへり (以下四首父の十三回忌によめる)

五九

天地をうたたた樂しと掌合せて謎の如くも死にしわが父

六〇

悪しき名は子等がためにも遺さじと念せし父
にならはぬや誰

おもかけに見ゆるわが父やぶれたる黄袈裟を
被き白菊を折る

外套をぬぐとき雨の水たりぬかんでらの火の
暗き屋根うら

無造作に蠟燭の火を吹き消して巢のごと被く
屋根裏の床

珍らしくこの男こそ哀れなれ生きぬる程は専
ら嫌はる

六一

金網かなあみにあるじの鶴つるの歎なげくとき下おりきて水みづを浴あぶる小雀こすずめ

六二

前髪まえがみを赤あかくむすべるお三輪みつわをば眺ながむることとき
石竹せきちくの花はな

埃ほこりゐる書棚しょばなさへこそ悲かなしけれ君きみを見みぬまま物もの
も讀よまねば

高機たかはたにしら絲いとかけて妹いもが織おるよろしき聲こゑの天あま
つかりがね

足あしなへも禿はげたる人ひとも求もとむてふさびしき中なかの
樂たのしみに生いく

班鳩いかるがの鋼封藏こがせうざうあくる番人ばんにんの提さげたる鑰かぎをとり
まける秋あき

六三

六四
手近なるおほよそ事は猫脊なる醜き人に任せ
んもよし

まなぶたに寸ほど白く埃るぬ大いなるかな奈
良の毘盧遮那

木がくれし植物園の屋根がらす青きにほひに
蜩の啼く

蠟石の四角の卓に肱つきてうすくらがりの秋
風を聴く

片隅に窓を見上げて物食ふは富家の息子もさ
びしきものを

あな寒し夜更けて歸るひとり身の袴を吊す釘
の手ざはり

或時は見つつ心のなぐさみぬ
に残るも
I
の汚染の指

土ほこり黄いろに揚る風の日の乾ける畑に根
葱の花咲く

清らにも蠟の滴る如ひとしづく閉ぢたる目よ
り涙滴るかな

木屋街のひくき欄も濡れにけりその前髪を伏
せて歎けば

かなしきは厚白粉の襟あしと少し傾く銀の
んざし

水ぎはの芒の如くひかりたる瓦斯の灯かげの
銀のかんざし

うつり香は酔ひの如くに残るらん一昨日の夜
と早くなれども

世のなかに思ふ男をたのますて何を見上ぐる
黒き上目ぞ

静かなるわが歎息になびき合ひ清き香爐も秋
の夜に泣く

池に來て蘆の浮葉につまづきし風の脛見ゆし
ろきさざ波

十五より身の瘦せけるをいかげせん人を戀ふ
とて物を讀むとて

雨やますとくだみなどの咲く上に濁水いでて
沼に似るかな

七〇
こころよく物ともせず
に新しき俵の上を越ゆ
る濁流

洪水に施行の旗をひるがへし
小舟あつまる寺
のきざはし

眺むるは白きむくろか尺ばかり
電柱いでし上
の野がらす

家の上に黙す妻子ら
家の中に七日水漬きて出
でぬその父

花嫁の荷と死馬をもてあそび
千住の橋を越ゆる
洪水

ものの蔓おどろまじりに枯れて
匍ふ築士けぶりて鶯の啼く

七二
汐青くさせば斜に末白くわたつみに入る石の
切厓

春立ちぬ枯れて河原に残りたる蓬がうへも陽
炎の引く

あきらかに平たき物を見るよりも我れは險し
き闇を踏ままし

よ
折々の思ふ所の違へるを斑に散れる紅梅と見

酒過ぎてかの人もを云ひ過ぎぬ思ひ過ぎつ
つ黙す我がごと

われよりも丈高き木の下に見るかの月はなど
小さかるらん

小徑三つありて劃りに薔薇咲きぬ我れは行か
すて見つつ樂む

金を延べ銀また錫を延べて刷る冬より春に移
るおもむき

鼠だに春ちかづけばなまめかし我が温室の紅
梅に寄る

二人より三人四人となりぬれば言葉おほくて
真減りゆく

瘦せがちに目の凹むまで物讀みて時に嗅ぐな
りくちなしの花

うちつけに云ふことはよし徐ろに云ふことよ
りも情渦巻く

寛らはみな奇を好む心よきかぎりを盡し傷ま
んがため

わが歌は人嗤ふべししかれどもこれを歌へば
みづからの泣く

大寺の塔のかなしき止む間なき嵐に立ちて中
空に鳴る

走れども重き鐵鎖を引く我れは人の半も歩ま
ざるかな

権の木に朝日のさせる停車場掛樋を落つる秋
の水おと

おぼしまの前の水にも霧ふれば襟の濡れんと
わぶる舞姫

飛とび去さりし燕つばくらの巢すもあはれなり木この葉はちり入い
る冬ふゆに及およべば

七八

その父ちちの負まけざらひをば傳つたへたる兒こ等らがため
にも天地あめつちを泣なく

かぐはしき春はるの泥どろ咋くふつばくらめ主人ちゆうじんが塵ちりに
伏ふすと何なんれぞ

事ことごとに澁じせ面めんをしてきたなくも皮かわの財さい布ふを覗のぞ
く一ひとむれ

おもひでを語かたらんとして咽むせびけり猶なほそのかみ
の涙なみだおつれば

ををしくもわが頬ほの色いろを好よからしむ超てう人じんの書しよ
と赤あかき太陽たいやう

七九

何の樹ぞ河より來る風に立ち鬱金のひろ葉お
ほかたは散る

八〇

静かなる心を打ちて土に据る我れを幾たびい
きどほらしめ

おち葉せし細き枝より露のごと瘦せて秋散る
山ざくら花

大海を長くかぎれる白き砂君とこの朝踏みて
歸らじ

手にとればわびて住みけん父母の涙おちきぬ
水引の花

わが愁しくしく泣きて走るなり無花果の葉を
雨の叩けば

八一

京洛の人おどろきて秀才とも美少人とも呼び
しいにしへ

八二

かの少女われを誤るかく言ふはかの少女をば
讀へんがため

かの若き媚びたる貴女のささやきも又あたら
しき琴の音と聴く

憂き戀の果ともあはれ散る櫻春去りゆけばつ
ひにさびしも

小麦畑むしろの如く黄ばむ日に土筆の生ふる
砂山を行く

すべて猶知り易からすかのひとみその黒髪に
物を思ひぬ

八三

大風おおかぜに鴻つるぎの鳥鳴とりなく二方ふたかたに吹ふき分わけられて見難みづかし
しと鳴なく

物言ものいひてもえぎの蚊帳かやをくぐり來くる我兒わがこは清きよし
うら寒さむきほど

又逢またあはじしか言いふは君海きみうみこえて旅たびに死しなまし
かく言いふは吾われ

大船おほぶねが錨いかりを沖おきに卷まく音を聞ききつつ目にす白しろき
襟えりあし

ひとりねの寢臺ねたいは泣なきてきと裂さけぬ櫛かみの荒木あらく
に秋あきのとほれば

汗あせあはくうす白粉おしろいにまじりたる夕ゆふの如ごとき山やまざ
くら花はな

われ喚ぎて三たび泣きけり袴をば柱に吊れば
酒の香ぞする

秋の野の馬の屍にあつまれる蠅もさわげば中
空に鳴る

川端の大煙突のもとに栖み春の夜に啼く穴い
たちかな

河原よりやがて歸れば欄干なる前髪は云ふ疲
れ易しと

壯年にして猶遊子歌ごとに竹子の調を帯びに
けるかな

世の中に思ふ男をたのまずて何を見上ぐる清
き上目ぞ

父母の墓をめぐりて泣きにけり遊子も時に孝子の如く

うら若く二十ばかりと見ゆれども金の柱を巻けば身に適ふ

彼等みなないがしるにぞ我れを見る然か見ること教へしも我れ

我等みな物を傷めばいと深し第一の話を不用意に吐く

大地に日の暮れゆけば空高くひかりを放つ富士のしら雪

芹の芽をうすき氷の閉ちたるに帯のうつれる
小き舞姫

三味とりて礮の晝にも弾きにけり別れがたし
と歎つ心を

岬なるいさごの上の松が枝に鴉の啼きておと
す朝露

人の目を見つつ物言ひ錢欲しとわびつつ市に
猶も住むかな

おもしろき酒場のつばめつばくらめ濡羽を酒
にうつしつつ鳴く

秋萩にむら雨ふれば香りけり君の涙にわがむ
せぶ如

かの空の群青いろにあはせつつ心を塗れる金
色と赤

池に來て蘆の浮葉につまづきし風の脛見ゆ白
きさざ波

九二

土ぼこり黄いろに揚る風の日の乾ける畑に根
葱の花咲く

聲あげてわが悲むもよろこぶも皆くるほしき
沈酔の歌

しら菊の倒れて咲くをかなしみぬ小き素足の
土を踏むかと

草木如す身にはあれども寛らは歌ふ所をか
天に享く

もの言はんかの流俗を笑ひ見て高きを歩む三
四五の友

九三

君が取る赤き小櫛を思ふ目にひと葉の楓うつ
くしく散る

蠟石の四角の卓に肱つきてうすくらがりの秋
風を聴く

釋迦牟尼も盜跖もみな隠れたるむかしの土へ
蛇穴に入る

やうやくに悲むところきはまれば嵐の如くわ
が心鳴る

嵐嵐目なき嵐は歸るべき方をおもはず青空に
鳴る

山畑に掘りし百合根を山川に洗へば白し我も
汚さじ

棕^{しほろ}栢^けの毛^けを立^たてし^が如^{ごと}き赤^{あか}白^{しろ}髪^がめじり^り下^{くだ}りて
牙^{きば}出^いづる人^{ひと}

病^{やま}む身^みより呻^うけば出^いづる摩^ま尼^にを取^とり子^こ等^らに示^し
して掌^{てのひら}に置^おく

酒^{さけ}を見^みてかなしき心^{こころ}先^{さき}だつはしばしば醒^さめし
その寒^{さむ}さゆる

天^{あま}地^ちを常^{つね}に悲^{かな}しとおもへども黙^だして恐^{おそ}び歌^{うた}ひ
て紛^{まぎ}る

駱駝

九八

(一九〇九年作)

しよざいなさ動物園の木の柵に面いだしたる
駱駝ならねど

わが顔を打撫づる時駱駝をばふと思ひ出でて
さびしくなりぬ

長長と柵より首を出だしたる駱駝も我れも倦
みにけるかな

たくましき駱駝の背に身をまかせ行方定めぬ
旅に出でまし

いたましく駱駝の如く膝折りて瘦せさらばへ
る我れを見に來よ

九九

をちかたの駱駝の小屋のにほひしぬ冬の木立
の雨となる時

100

動かざる駱駝の首を見つめつつ我れも静かに
わが時を待つ

棕櫚の葉の軒に鳴るとき眠りたる駱駝の近く
立つかとぞ思ふ

萩之家先生の例祭に

(一九一〇年作)

若き日に見奉れる名残かも師を思ふたび我れ
若くなる

青山の青き木のもと朝早く初霜おきぬ師の大
人の墓

101

師の大人の御墓の萩の古枝より落つる露にも
心咽せ入る

在しし日もいまさぬ今日も師の大人に仕へま
つれば己れ恥なし

師の墓の霜をぞ掃ふわが胸の涙を掃ふことの
如くに

御子たちの後邊につきて此弟子も寒き御墓に
御酒たてまつる

みこころは通ひ御聲は常きけど天にぞいます
萩の家の大人

四十路にも身の近けれどそのかみの若き心に
師を戀ひて泣く

かしは手を打てば悲しもくりかへし打てば樂
しも師が御墓べに

一〇四

師の早く世にいまさぬも譏られてわが残れる
も涙こぼるる

已れをば立てよとありし天飛ぶや師の雄たけ
びは後も新し

うつし世にしばしあらはれ師と我れと歌ひし
こともあはれ不可思議

已が身の無からん後も師の御名をいよよ顯は
せ弟子御末われ

草木なす身にはあれども師の大人に次ぎて歌
はば八千代ならまし

一〇五

人磨も家持もあれど師の大人のひと言ゆるに
目覚めき我れは

父の逐ひ兄の捨てける寛をば愛しと誨へし萩
の家の大人

師を見れば私ごとを言ひし癖いまさぬ世にも
残りたるかな

師の大人をひとり戀しと思ふとき寒き日も行
くその御墓べに

肩すこしいかれる癖も師の大人に似ませる御
子よ我れな泣かせそ

駒ごめの御庭の椿しら玉に似る花咲けば師の
忌は来ぬ

冬ご飢

(一九一〇年作)

鴉からすきて朝あさ日に鳴なげば大橋おほはしの杭くわの小雪こゆきの薄赤うすあかく
散ちる

軒下のきしたの瘦やせし乞食こじきの目めぞ光ひかる雪ゆきにならんと曇くも
る夕ゆふぐれ

霜しもしろき郵便箱ゆうびんばこに縛しばられし如ごとく眠ねれる醉男さかちか
な

外套ぐわいとうをあたまに被かり息吹いきふきぬ朝あさの二時にじより霜しも
を踏ふむ人ひと

寒さむきまま錢ぜにのなきま溝板みぞいたの雪ゆきふみならず早はや
く夜明よあけよ

宿無しの男と寒きうかれ女と夜更けて言ひぬ
酒の錢欲し

軒下の荷ぐるまに寝て伸ばしたる裂けし靴に
も霜しろく置く

宿無しの子は皆死ねと追ふ如く吹雪ふりきぬ
橋の下まで

雪の軒繩を厚布に巻く男酔ひて歌へば北國の
こゑ

仕事無きこと七八日食はぬこと二日となりぬ
雪の軒した

片隅に来て寝し警女の三味線を鼠の鳴らす寒
き安宿

かるたをば思はぬ時は酒しろを思ふやかからに
雪のふりきぬ

一一二

今得たる銀錢をもて雪の夜の酒場を叩く飢ゑ
したはれ女

われら皆父の父より飢ゑつれば食はんこと
のみ力とぞする

たのみなき世にはあれども眞しき事一つあり
飢ゑて人死ぬ

紡績の汽笛早出のつとめ人夜天のもとなみに
霜を泣く

霜うすく甲板に置けば網に入れ上荷にしたる
鶏の鳴く

一一三

あかぎれの手を口に吹くしかれども思ふ所は

ミューズ Apollon
Muse Apollon

鹽原の秋

(一九一〇年作)

二荒山高原の山那須の山山かせ我れを吹きて
寒き日

いざと言ひて流竄の子を待つ如く荒野の御者
は瘦馬を附く

西那須野ここ過ぎて見る野は深しわが静かな
るたましひの國

一一六

那須ゆけば雜木も草もはらはらと紅葉を投げ
てわが馬車に入る

那須山に日の落ちゆけば秋風は雜木が原にか
くれつつ泣く

あはれなる馬車の角ぶえ鹽原の荒き岩間を
めぐりつつ吹く

山にきて岩打つ水をめでにけり悲む人もいと
まあるごと

谷近く鏡な取りそ霜を吹く岩間の風に指の凍
れば

一一七

木の瘤をとりて作れる煙草いれ壘におけば山のさびしさ

一一八

那須の野を過ぎて白くも山に入るかなしみの路ひとすちの踏

年ごろのおとろへし身に湯を浴みぬ琅玕を切る塩原の谷

山裂けて瀧あるところ板橋す飛沫に濡れて馬を立つべく

秋山の神に手向くともみぢ葉を卓にかこみて杯を舉ぐ

夜ふくれば山の湯ぶねに月ありぬわが秋瘦の肩をてらして

一一九

三尺の薊のくきの立枯れて塩原の山石に霜ふる

一一〇

谷の石みな精を得て水に栖み白き裳裾を引きて歌へる

塩原の荒き岩間の霜まじりかへで散りしく赤く散りしく

相抱き切厓に死ぬよろこびを塩の湯に来てまたおもふ人

わが杖にうるし錦木蔦の葉も觸るれば散りぬ赤く悲しく

懸樋より立つ湯けぶりを二尺ほど隔てて谷に垂れしもみぢ葉

一一一

風ふけば湯ぶねの人を隔てけり大岩に立つ白
き湯けぶり

下り立ちて下枝を引けばはらはらと朝川に散
る樽金の紅葉

石を撫で紅葉をかざす樂みはされども飽きぬ
戀にあらねば

兩日にして塩原の山を出ぬ谷のかなしさ秋の
かなしさ

こちよし高原山を背にしつつ那須の大野を
歸るわが馬車

砂

(一九〇九年作)

眞はだかに錨を負ひて追はれ行くまぼろし見
えて熱き砂かな

喜ひは砂ならねども指間よりすべりて消えぬ
東の間の後

嘲りて砂に建てたる柱ぞと云ふとも我れの家
なるものを

こころよくひと夜の水のもてきたる新しき砂
山を作りぬ

うしろより砂を食へるやからぞと云ふ聲ひび
く我を譏るか

わが涙なみだましろき砂すなとかはりけり由井ゆいヶ濱はま邊べの
そのかみの路みち

一二六

七日なつかほど砂すなをば揚あげて風かぜやます夕ゆふの月つきのすさ
まじき色いろ

衣かぶ囊しなる銀ぎんの小こ儼げんの盡つくる時とき膝ひざをかかへて砂すな
に眠ねむりぬ

わが家いへの裏うらの木き戸どより水みづ鳥とりの足あしあつつづく半はん
町ちやうの砂すな

男をとこ待まつ赤あかき日ひ傘がさの點てん線せんを撒まきちらしたる海うみ岸がし
の砂すな

富ふ士じを這はふ嵐あらしとともに舞まひ立たちぬ亡はう靈れいに似にる
須す走しりの砂すな

一二七

灰の底より

(一九一一年作)

時きたり心目ざめぬ眞黒なる被衣は落ちぬ曙
の來る

何事と問ふ所なし己が身を破らんために我れ
は馳せ出づ

日は急に血の燃え盛る點と見ゆ我が欲望の中
心と見ゆ

久しきをしらず刹那の充足に我れは踊れり天
地も踊れり

境なし固よりここに愛もなし唯に生きんと叫
ぶ角闘

來り見よ野性と野性この外に千とせ尋ねし愛も美も無し

偽はりを習はんとすや生きながら死なんとするや夢を頼むは

書齋より物云ふ乞食かれらをば皆屠らんと思ひ立つわれ

耳かすな我等がために血とならずパンとならざる人のたは言

血にまみれ噛み合はざれば物足らず生きてふことは戦へること

強き子等世に新しき瘞瘵と窒息を経てよみがへりきぬ

見よ日さへ光の手もて地を拜み我等が生に習
はんとする

一三二

ためらはぬ力ふたたたび我れにきぬ日のぼり花
の裂くるここに

血の色のかすみの中にしろがねの涙をながす
新らしき月

大土を今出でし人槌を負ひ兩膝立てぬ切石の
上に

にほやかに明るき肉を琴に弾き樂しと歌ふ死
なぬたましひ

美しくしきもろ手の上に涙しぬ新らしき日と打
むせびつつ

一三三

一三四
なみなみと杯さかづきに注つぐ痛いたきまで強つよく香かれる刹せつ那な
をば注つぐ

美うくしき音おん樂がくとなり色いろとなり匂におひとなりて我わ
れ踊おどりゆく

舞まふによく戦たたかふによく臥ふすによし土つちより出いで
し真ま裸はだかわれは

きはやかに黒くろく雄おとこ雄おとこしきわが影かげを真ま晝ひるの土つちに
映うつす天あまつ日ひ

真ま裸はだかのたくましき人ひとくろがねの鋤すきを荷になひて行ゆ
けばとごろく

新あたらしく若わかき手た力ぢからみづからを黄わう金こんに鑄いる若わかき手た
力ぢから

すこやかに張りて緊れる筋骨を試す日きたる
地の戦ひ

涙より改まり來し目の清さ鐵鎖を断ちし脚の
雄雄しさ

若やかに直き心を被ふ髪しろき額につやつや
と垂る

人あまた泣言するを蟋蟀などの羽擦る音とよ
そ事に聞く

わが手もてわが常磐木を額に巻くわが杯にわ
が酒を注ぐ

よろこばん勝利の人のさびしさを知ること
また我れの誇りぞ

一秒も空しくせざる氣丈夫さ若き力の身をば
噛むため

身はここに水晶のごと透きとほり湯のごと湧
きて心目覺めぬ

美しくしき世を跳び越えて赤黒き惡の世を行く
更に美しくし

彼等みな飢の足らねばいと甘きその自らを忘
れたるかな

習俗に媚びへつらふや人言に耳をば貸すや何
のいどまに

もろともに此世盡きせず樂しとは小鳥も知り
てひとり囀る

倦怠四篇

一四二

×

獨心者が打寄れば、

しようもない事をよく話す、

わたしもね、それとおなじでよく話す。

わたしは相手の無い可愛相な一人もの、

それでゐて獨でよく話す。

くだらない事でもねえ、

話して仕舞へば氣が晴れる。

×

籠の九喚鳥がしやべりだす、

「あら金さん、金さん、

ちよいと寄つて行きなてことよ。

寄らない、ひどいわ、あばよ、あばよ。」

誰に九喚鳥は習つたね、

いや、誰でもいい、誰でもいい。

一四三

×

さまあ見やがれ、あの男も駄目だよ、
もう三十を越したよ、古いよ、
よぼよぼだ。
封を切らないで置く部屋の隅の雑誌の中から
しよつちゆう斯んな聲を聞かされる。
鶯が鳴くのだと思へども……
なんの因果かねえ。

×

何時覗いても小さい卓子に、三脚の椅子、
カメラリヤを納れた箱に、安質母尼の吸殻落とし。
「又雨か」と言つて旦那様は一つの椅子で新聞
を御覧なされ、
奥さんは下の机で黙つて字をお書きなさる。
薄暗くて陰気なお書齋兼應接の間、
お客のない二脚の古椅子が今日も亦しよんぼ
りと……

「おめえ、おめえ」と旦那様を呼捨にする、あの
紅蓮洞さんでも來ればよい。

黒き聲

(一九〇九年作)

彼處に今語るが如し、
暮れて行く高臺の大寺の尖塔に、
振り返り見よ、また彼方、
ちらほらと涙こぼるる如くなる
公園の並木の中の瓦斯燈の青白き火のかけに
語るが如し、烏羽玉の黒き或るもの、
肩ゆすり、指さし示し、耳打ちし、

煤色の短き翼折々に興する如く羽ばたきぬ。

言ひけるは、

彼は亡びん、衰へん、

無智の、臆病の、

ささやけき善根を頼みて

大悪を怖るる匹夫の、

あはれ彼が來し方は皆みぐるしく陋劣なり、

我等今彼を離れて

實らぬ樹の一本枯れ行くを祝はんと。

夕されば斯くささめきて語る聲われに聞ゆ、

今日の日も暮れぬれば又聞ゆ、

都の中のさわがしき工場の汽笛、電車、人の雑

沓、

芝居の囃子、それらにも混れざる夕暮の黒き

聲。

支那街の一夜

(一九〇九年作)

物すべて揺めきぬ、阿片の中に。
窓掛の猩猩緋、ひろき寢床の
虎の斑の皮衾、柱に掛けし
大鏡、しろがねの燭の臺。
わが膝の君は今(眞白き肌)

たゆげにも手を延べて杯とれば、
領きて我れ注ぎぬ、傍の瓶の
金の粉の浮き昇る緑の酒を。

強き酒、汗ばめる肌の白粉、
君が髪、香油の香、まじり匂へば、
魂は先づ眠り、肉のみ聞きぬ、
嗅覺の夢の樂——蜜の諧音。

小曲六篇

(一九〇九年作)

×

潮が荒うて寄りつかぬ、
千石船が寄りつかぬ。
船の衆も若い、
磯の衆も若い、
繩を抛てや、繩を。
そおれ、おいきた、

わしや老人、
誰に頼まれた訣でなけれども、
大繩を手繰る、
ぐいぐいと手繰る。

×

真赤な自動車^{じどうしゃ}が飛んで来る、
真赤な一臺の自動車^{じどうしゃ}が
東京の街一ぱいになつて飛んで来る。
乗つてゐるのは女かね、

なんだ、また、目の光る、

そして出つ齒の、肥えた黒奴め、

僕はいつも此辻で奴におどかされる。

あとには自動車自動車の砂砂けぶり。

×

蠟石ろうせきの卓たに薄日うすひが射さす時ときも、

しなやかに鉢はちの犬鬘いぬだてが咲さく時ときも、

吹きながら熱あついココアココアを吸すふ時ときも、

雨水あまみづに濡ぬれた外套ぐわいたうを脱ぬぎ放はなち

勿論もちろん一人ひとりで冷つたい蒲團ふとんに寝ねる時ときも、

なせかしら、霞かすみのやうに目めに見みえる、

赤あかい、細ほそい、匹田ひつたの扱し帯ごきが目めに見みゆる。

×

瓦かはら、瓦かはら、桐きりの紋もんのある瓦かはら、

伏見ふしみ桃山ももやま、秀吉ひでよしの城しろの瓦かはら、

わしの親おやの歌うた法師ほふしが愛あいして居ゐた瓦かはら、

そんな由緒ゆいしよなんか何なにうでもいい、

忘わすれッちまへ、瓦かはら、

打てと叩けど音せぬ瓦、

土となるべき日蔭の冷たい瓦、

いや、お前ぢやない、わしの事だよ、瓦。

×

不恐の枯れた蘆間に残る雪、

夕ぐれの、紫がかった春の雪、

それを見ながら池の端ゆけば

別れた女のあるやうな、

逢はれぬ女のあるやうな、

泣きたいやうな、ひよんな氣に

わしの心もふいとなる。

不恐の枯れた蘆間に残る雪、

夕暮の紫がかった春の雪。

×

初めて逢つたのも新橋すていしよん。

最後に逢ふのも新橋すていしよん。

迎へに出た日はホテルの様な氣がしたが、

今夜はお寺の様に氣が沈む。

西から来た女はまた西へ歸つてゆく。
二月七日みぞれ降る夜の新橋すていしよん。

乞食

(一九〇九年作)

乞食の子が来る、
乞食の子が来る、
三人、五人、乞食の子が……
十四五の女乞食を頭に、
小さいのは五歳ばかりの男の子の乞食。

誚はれた、灰色の族よ、

埃だらけの髪、裂けた、短い、

黒い、垢光のする襪褌の着物……

或者は単衣、或者は

綿の出た古座蒲團を負うて居り、

また、奇抜に、蛸のやうな口をした今一人は

茶色のズツクの砂糖の空袋から首が出て居る。

その裂目から裸の腹が……

更に其下から陽物が……とす黒い二本の脚が……

ああ悲しい、不調和な、乞食の子供等よ、

東京は今日正月二日、

客齋の人も貴族の如く着飾り、

忘恩の人も善人の如く笑顔作り、

(何がめでたいか)めでたいと皆祝ひ交し、

車から、馬車から、長閑かな足取から行くもの

を。

乞食の子供等よ、お前達は、
なせ、其様に急いで、逃げる様に大通を横ぎる
ぞ、

大通の角、

高等理髮所の前を曲れば、
向合せに、安下駄屋、小鳥屋、洗濯屋、薪屋……
乞食の子供等は入り亂れて
啞の生徒のするやうな、音も無い、

静かな不思議な手真似と、目と目の相圖を交
して、

細い、日あたりの悪い、
泥濘の上に薄氷の張る、横町へ駆けて入った。

今すれちがひに、大通へ

この横町を出ようとした自分は
傷しい乞食の子供等と同じく、
自分もまた、東京の正月の大通に

調和し難い、さびしい、惨な身を感じ、

この刹那、乞食の子供等は

皆なつかしいわが親族の子の様に思はれて、

われ知らず引返し、再び横町を、

乞食の子供等の後から、二足三足附いて行く。

ああ驚いた、

青い毛布の破片で拵へた、大きな袋が一つ

一人の乞食の肩から卸され、

八人の手が忙しく袋から口へ

攫んで食ふのは雑煮餅、焼肴のあら、

ぼろぼろに凍てた冷飯、

噛む口にかりかりと音のする数の子――

みんな何處かの家の埃箱の今朝の餘り。

乞食の子供等は皆うまさうに頬張つて、

なんの穢なさを思はう、

飢ゑた者は唯食ふ量の多いのを思ふばかり。

中にも一つの餅を奪ひ合つて、
 大きな一人に擲られたが、
 小さい者も負けて居ず、悪態をついて打ち返す。

だしぬけに「巡查だ、巡查だ。」
 かう注意した一人の聲に驚いて、影のやうに、
 皆駆け出して横町を真直に逃げて行く、
 ばたばたと、鞆の切れた素足のまま……
 ただ一人、十四五の女を食ばかりは、生意氣に、

まだ色の褪めない赤い鼻緒の草屨を穿いて居
 る。

大通の方から、一人の巡查がぶらぶらと遣つ
 て来た、

巡查は大分屠蘇に酔つて居る……

駿河台の夕

(一九一〇年作)

一六八

闇がすうつと大きな口を開いた、
呑まれまいとして硝子障子が慄へてる……
硝子越しに、ちらと見えて消えたのは
青白い骸骨の薄ら笑ひ……

おれは今、母の青臭い胎を二度出るのがかしら、

目をつぶれ。

後ろから、書棚に掛けた赤い印度更紗の陰から
あらまたお定まりが遣つて来る。
てんさいばくちと、そら吹けそら吹けの踊と、
監獄の窓と、火葬の小屋の火と……
いやに錯亂になつた気分、
やけに苛だたしい気分……

一六九

そして、しんと滅入つた重苦しい黄昏……
おれは目を開いたまま、音の無い騒がしい夢
を見て居る。

突然、血だらけの赤ん坊がだだを云ふ、
二階のしたの、湯殿の板間に寝そべつてだだ
を云ふ。
併し、やつぱり喚く聲がしないね。

や、赤ん坊ぢやない……誰だ……誰だか……
だだを、だだを、だだを静かに捏ねてゐる。

時計の針は死んだやうに
びつたり六時を斥してゐる。
何か言へばいいに、細君も
冷たい目で、唯だじつと向ふを見てゐる。

おれの四方から集る

青白い骸骨の薄ら笑ひ……

正月

(一九一〇年作)

春が来た、おめでたう。

ああ出たらめの

乾きはてたこの詞の音。

……おめでたう、と

壊れた玩具の手風琴のやうな音、

それを少し引きつくりひ、
僕もまた人並に君に告げる。

一七四

若い友よ、

新しいその脊廣が

如何にも氣が利いて才子らしくよく似合ふ。

春が、正月が何んだ、

日の丸の旗か、シルクハットか、

酒か、貴婦人か、

それとも感傷派の夢のやうな歌か。

夢だ、すべて空だ、

君よ、唯相見て苦笑するか、黙すか、

此外に何かがある。

夢から生れて、夢の初歩を
知りたがるあの子供等、

一七五

あのがやがやと煩い子供等、
妻よ、早く着替をさせて彼等を逐ひ出せ。

妻よ、さう火を吹くな、朝から、

悪い杖炭のいぶること。

ああすべて廢顔の氣もち……

をかしくも哀しくも無い、

ただ灰色の正月二日の朝。

友よ、新しいその春廣が

如何にも氣が利いて才子らしくよく似合ふ。

應接室

(一九一〇年作)

一七八

みんな欺しに来る、
みんな俺を欺せる心算で居る、
みんな俺を先生先生つて言ふ、
みんな俺を喜ばす氣だよ、
みんな俺の前で要らないお喋りをして
みんな俺に齒くそ混りの飛沫を沿せて行く、

俺は唯はい、はあい、と言つて聞いてゐた。

俺は知つてゐる。みんなが得意で歸つ行つた

ことを。

俺が閉口して沈黙し、

悄げ返つて苦り切つてたとみんなは思つたん

だね。

いい氣なもんだね、あの連中は斯う云ふ侮辱
を俺から受けて、

却つてせいせいとしたいい氣持の誇大妄想狂

一七九

になれるなんて、

まあ随分おめでたく出来てるね。

一八〇

併し俺も格別損はしなかつたよ、

いや、損どころぢやない、お蔭で知つた事があるよ。

あの連中はね、頭の分形計り氣取つてゐてね、
著てゐる衣服はみんなちぐはぐなんだね、
襟垢も随分ついてたよ。

それから、之もあの連中のお蔭で氣が附いた
んだがね、

宅の應接間の障子が大小十二所破れてゐる、
奥さん、ちつと氣をお附けよ。

一八一

煙 草

(一九一〇年作)

啄木が男の赤ん坊を亡くした、
お産があつて二十一日目に亡くした。
僕が車に乗つて駆けつけた時は、
あの夫婦が間借してゐる喜之床の前から、
もう葬列が動かうとしてゐた。
啄木の細君は目を泣き脹して店先に立つてゐ

た。

自分は直ぐ葬列に加つた。
葬列と云つても五臺の車が並んで歩く限だ、
秋の寒い糠雨が降つてゐる空は
淋しい葬列を露に見せまいとして灰色のテン
トを張つてゐる。
前の車の飴色の幌から涙がほろりほろり落ち
る。

あの中に啄木が赤い更紗の布呂敷に包んだ赤
ん坊の小さい柩を抱いてゐるんだ。

啄木はロマンチックな若い詩人だ、
初めて生れた男の兒をどんなに喜んだらう、
初めて死なせた兒をどんなに悲んでるだらう、
自分などは兒供の多いのに困つてる、
一人や二人亡くしたつて平氣であるかも知れ
ない。

併し啄木はあの幌の中で泣いてゐる、
屹度泣いてゐる。

どこかの街を通つた時、
前の車から渦を卷て青い煙がほおつと出た、
またほおつと出た。
ああ殊勝な事をする、
啄木は車の上で香を焚
いてゐるんだ、
僕は思はず身が緊つた。

今度は又ほおつと出た煙が僕の車を掠めた、
所が香で無くてあまいオリエントの匂がぶう
んとした。

僕は其れを一寸も驚かなかつた、
僕も早速衣囊から廉煙草のカメリヤを一本抜
いて火を點けた、

先刻から大分喫みたかつた所なので……
また勿論啄木と一所に新しい清淨な線香を一

本焚く積りで……

折から又何處かの街を曲ると、

「おい、車體をさうくつつけて歩いちや可かん」
と交番の巡査がどなつた。

僕の車夫は「はい、はい」と素直に答へて走つた。
そんな事で僕と啄木の悲しい、敬虔な、いい氣
持の夢が破れるもんぢやない、

二人の車からは交代にはおつと、ほおつと煙

がなびいて出た。

星

星を見る度に歎く。

あれ、あの空にも囚はれた者がゐる、

行きたい處へも行かず、

どん底へも落ちず

何時の間にか太陽系に吊り下り、

無自覺に同じ方へ走つて行く、

あはれな傀儡、無意味な光り物……

星を見る度に又歎く。

氣の毒な、絶望のわが友よ、星よ、

併しながら自分は猶おまへが羨ましくてなら

ぬ、

自分には目がある、自由意志がある、

なまなか批判の心がある、努力と労働とがある、

それでゐて、なんて惨めなざまだらう、

吝臭い小善を積んで、大悪の「靈宇宙」の前に哀

願の手をさし上げ、

微かに悲鳴しながら同じ方へ走つて行かねば

ならない。

星を見る度に又歎く。

自分の一步一步に放つ光の薄暗さ、

その心細い光は自分達の醜い、骨立つた

獣の様な姿を照し、一步一步に消えて行く。

ああ、ああ、空の星よ、

自分^{じぶん}は絶望^{ぜつぼう}することさへ許^{ゆる}されずに、
斯^かうして何時^{いつ}まで同じ方^{かた}へばかり頼^{たより}無く走^{はし}つ
て行く^いのか。

冬のうしろ姿

(一九一一年作)

師走^{しはす}の横^{よこ}長い白壁^{しろかべ}の
暖爐^{だんろ}の前^{まえ}に足^{あし}を伸^のべ、
枯木^{かれき}を投^なぐれば花^{はな}の香^かがする、
落葉^{おちば}を投^なぐれば紅葉^{もみぢ}の香^かがする。
「冬^{ふゆ}」の手^てで三月^{みづき}ばかりも温^{あたた}めた
「時^{とき}」の旅籠^{はたご}の石造^{いしづく}り、

ほつほつと立つ新しい焰の氣持よき。

一九四

「冬」は今長い火箸をさしおいて、
がらんちやうな、筋立つ臍を前に引き、
脊を屈めて生眞面目に
締めた口元をちよと歪め、
今年の藁でこしらへた
青い草鞋を手で結ぶ。

名残を惜む「冬」の心には

忙しなく更けて行く

大晦日の夜の悲しや。

「冬」は身を慄はすやうに立上り、

何か云はうとして又口を締め、

少時じつと火をば見詰める。

歸りゆく「冬」の着附は、

素鼠に霞小紋の布子を着て、

一九五

黒い襟とる栴色の

道中合羽にまんぢゆ笠、

笠の紐結び目に

柔かい胡麻塩髯の縮れ掛る淋しさ。

俄かに近寄る戸の外

狂ひざわめく物音に、

「冬」は切なく氣を取直す身の科

折から、柄香爐を執る微風の童部等が

眞つ先きに大戸を開けて駆け入れば、

鴨茶の衣を着流した

木靈の群は酒壺を肩に載せ、

猩々緋の上衣に白い羅の裳の

若い花の精達は篋篋を抱き、

弾きつれ、舞ひつれ、歌ひつれ、

はれ、やれ、よお、ほいと「春」を祝うて亂れ入る。

この新客の一群に

「冬」は目も呉れず、すりちがへ、

走り出づれば、寺寺の

元朝の鐘が鳴り出した。

春の鳥

(一九一一年作)

いつに無い、今年の二月の暖かさ。

ゆうべ夜通し、しつとり降つた春雨が

あとなく霽れた今朝の空、

くつきりと水色を張る明るさに、

光を受けた庭の木は

枝から枝へ

黄金の蒸氣を撒いてゐる。

1100

あれ、かさこそと、かさこそと、

小鳥の鳴らす嘴の音。

うすぐらい四疊半、

わたしの静かな書齋の板廂、

その上に來て啄くのは何の鳥。

姿見せぬも思はせ振りな、

チホロと金絲雀ならば鳴かうもの、

チーチーチーと目白にしても鳴かうもの、

小娘のよに羞んで、

ものつつましい口口に

唯かさこそと、かさこそと

あの心憎い春の小鳥のすさびかな。

1101

誠之助の死

(一九一〇年作)

二〇二

大石誠之助は死にました、

いい氣味な、

機機に挟まれて死にました。

人の名前に誠之助は澤山ある、

然し、然し、

わたしの友達の誠之助は唯一人。

わたしはもうその誠之助に逢はれない、

なんの、構ふもんか、

機機に挟まれて死ぬやうな、

馬鹿な、大馬鹿な、わたしの一人の友達の誠之助。

それでも誠之助は死にました、

おお、死にました。

二〇三

日本人で無かつた誠之助、
立派な氣ちがひの誠之助、
有ることか、無いことか、
神様を最初に無視した誠之助、
大逆無道の誠之助。

ほんにまあ、皆さん、いい氣味な、
その誠之助は死にました。

誠之助と誠之助の一味が死んだので、
忠良な日本人は之から氣樂に寝られます。
おめでたう。

小曲七篇

(一九一一年作)

春がきた、春がきた、

春がきたから何處かへ行こよ、

何處へ行こ、

酒のほひがふんとして

紅い鸚哥の啼く家か、

若い女が前掛で

×

涙を粗末に拭く家か、

裂けた鼓弓を構はずに

酔つた男の弾く家か、

ままよ、何處でも、

ただわしが生れた家で無いならば……

×

枯れたよな枝に

いとしや、まばらに咲いた紅梅の花

此花の心に似たよなことがわしにもあつた、

思ひだせないね。

いとしや、まばらに咲いた紅梅の花。

×

念に念をこめて

わしが大事なたましひの上に

塗つたる色はなあになに、

いとし女のてのひらで

金銀珊瑚を粉にすり

酒で溶してとおろりと

塗つたはまばゆい夢の色、

それを毒しよな、誰ぢやいな、

白墨でまつしろに塗り消した、

やんれ、まつしろに塗り消した、

わしやえ、わしやね、

わしやなんにも知らなんだ。

×

梟め、

真晝なか見えぬ目で枯木の上に

じつときままつて思ひ込む。

馬鹿だなあ、梟め、

思つたつて悔んだつて何になる。

二度と好かれる身ではなし。

×

出嶋の陰の朝なぎに

とろりと青んだ海の色、

濱の別荘の女しゆは

赤い傘さし、裸足で貝探る、

小屋の若い衆は鼻唄で網をすく。

春だなあ、

さうだなあ、

鶴鴿は砂の上で尻を振る。

×

春の田を打つ時は

親爺が憎いと打ちまする、

田の水を引く時は

従妹の心をと引きまする。

さてまた田の草をさる時は
世間がうるさいと採りまする。

その上、きやつこそは似非もの、

わしが僻の鳥を追はうよ、鳥を追はうよ。

×

裸で拾はれてきたやうに

養ひ親は云ふけれど、

空樽かなんかのやうに

娘は尻に敷くけれど、

わしの自由になる日が来ずにをらうか。

さう思や心が引き立つ、

いつまでも叩大工の養子ぢやないわいな。

雨

(一九一一年作)

釘くぎが降ふる、降ふる、鉦びやうが降ふる、
生なまあたたか針はりが降ふる、
暗くらい空そらから留とど度どなく。
なんと毒どく性せいな五ご月げつ雨あめぞ、
世せ界かいの何どこ處こに降ふることか、
降ふるは東ひがしの涯はてばかり。

黒くろ板いた塀べいに黒くろい屋や根ね、
牢ろう屋やのやうな日に本ほん家やに、
今け日ふも降ふる、降ふる、十と重じゅう二に十じゅう重じゅう、
鐵てつの格かく子しをいれ降ふる、
灰はいの色いろした張はり金かねを
雁が字じがらみに編あんで降ふる。
壁かべも、柱はしらも、椅い子すの背せも、

鏡かがみの枠わくも、ペン軸けんじくも、
本ほんの背皮せびも、薄うすじろく
一夜いちやの内うちに微かほが生はへ、
じめじめとする手觸てさばりは
蛇へびの窟くわに住すむこち。

吹ふき入いる雨あめを避よけながら、
雨戸あまどの陰かげにじつと居ゐて、
物ものを思おもへば、床下ゆかしたの

茸きのこのやうに氣きが腐くさる。
二十日はつか、ひと月つき、日ひを見みすに、
聽きくは涙なみだの重おもい音おと。

さればと云いつて何處どこへ行ゆこ、
修驗しゆげんのやうな高下駄たかげだで、
騎兵きへいのやうな長靴ながぐつで、
天子てんしのいますお膝ひざもと、
一足ひとあしごとに沼ぬまを踏ふみ、

肩まで泥の跳ぶ路を。

妄動五篇

(一九一一年作)

×

われは曙にさまよふ影なり、
亡びんとする或物なり、
亡ぶるを否み難きものなり、
われは珊瑚の色したる灰なり、
暮れゆく春の爐室なり。
われは自ら憐んで描きぬ、

わななきて氷の上に傾く焚火を。
おお、この崩れ落つる火の痛ましさを、
熱もなく、音もなく、寄る人もなく……
唯だはかなげに青みつつ淡赤し。

×

わが行手こそ闇なれ、真冬なれ、
あまたの兒を伴れたる乞食の孤獨なれ。
苦痛へ、苦痛へ、氷の路へ……
死の嵐は無残の爪を垂れて掴みかかる、

われは常に臨終の如く生き苦し、
高く悲鳴し得ざる所以なり。
はた、われは報復を想はず、
怨むべき標的をさへ失ひしかば。

ただ恃むは、わが心猶光れり、
水底の黄金の如く。
また恃むは、われに抗ふ力残れり、

傷負ひし獸も猶その角を前に向くる如く。

二二二

やはか、我れを棄てじ、

生き得る限り生きん、生き返らん。

恥辱も寧ろわが命を刺激する酒となり、

老も却てわが明日の糧とならん。

われは、かよわく蒼白き全身を露出し、
前に倒れし人人の血にのめりつつ進まん。

苦痛へ、苦痛へ、氷の路へ……

われはかの「虚無」に溶け得ざれば。

×

ゐざりよ、ゐざり、ことごとと、

ゐざり車を漕ぐゐざり。

往來の多い街中の

しき石路や、ぬかる路、

雨の降る日も、晴れた日も、

櫳を削つた木の片を

二二三

堅い二つの權にして、
 強い駱駝が根氣よく
 長い沙漠を往くやうに、
 みにくい姿を日に曝し、
 そこ目標はないながら、
 龜の歩みを続け行く。
 むざりよ、むざり、ことごとと、
 むざり車を漕ぐむざり。

彼れは素性も生國も、
 多くの昔に忘れてる。
 青い額に何してまた
 生れた日なんか思ひ出そ。
 黒い苛酷な宿命の
 悪病ゆゑに身は腐り、
 親きやうだいに捨てられて、
 唯だもう不斷に飢ゑてる。
 以前は人を怨んだが、

そんな餘裕も今はない。

ゐざりよ、ゐざり、ことごとと、

ゐざり車を漕ぐゐざり。

その淋しそな、單調な

車のおとに合せつつ、

痺れた口を張り出して、

断えず歌ふは歌でない、

慰めがたいたましひが

爛れた肉を咬み烈いて

おのが黒血を啜り上げ、

唯だ苦しさと、ひもじさを

刹那刹那に投げ出す

荒い、みじかい呻きごろ。

ゐざりよ、ゐざり、ことごとと、

ゐざり車を漕ぐゐざり。

すべて忙しい世の中に

乞食の歌を誰れが聞かう。
 路ゆく人は目を反し、
 おまはりさんは叱り飛ばし、
 わんぱくどもは石を投げ、
 馬車、自動車は脅かす。
 華奢な街家を外に見て
 地にへばりつく憂き身には
 風も邪慳に吹きつける、
 雨もはげしく降りかかる。

ゐざりよ、ゐざり、ことごとと、
 ゐざり車を漕ぐゐざり。
 大川端を歩くとき、
 彼れは折折おもひつめ、
 いつそ死のかと楽しみに
 水をば覗くこともある。
 しかし、木賃の片すみに
 彼れの子供が待つことを

思ひだしては、曇つてた

睡の奥に火が光り、

「ああ、生きてたい」かう云つて、

また漕いでゆく、ことごとと……

×

われにも家あり、

花もなく、光もなく、愛もなく、飾りもなく、

くろがねを経緯にして造り、

獸に於て檻と呼ぶもの、

これわが家なり。

無窮の苦痛に對して、

早くわが感覺は慣されたり。

わが家は地の陰に立ち、唯だ冷たし、

石たよび氷よりも冷えたる底に、

われは黙黙として妄動す。

そは効果あるか、無駄なるか、

われ知らず。

唯だ妄動はわが今日のすべてなり、

明日も恐らく……

われは久しく太陽を見ざれど、

想ふに、彼は昔の如く天の半を横ぎるならん、

太陽のために賀す、既に汝の脚の用なきを、

わが鬨は汝の訪はぬままに静かに暗し。

いみじき光を有つ多くの星も、また、

かの最も高き空の花苑に遊びつつ、

われに一瞥だも投ぐる暇なからん、

われは其等の星をも賀す。

われは知る、この檻を出づる期なきを、

また知る、孤獨はわが純粹の「真」を汚さざるを。

なつかしきかな、狭く、つめたき鐵の家よ、

借物ならぬ我が力もて、われは此處に妄動す。

此集に收めたものは、すべて自分が一九一一年に歐洲へ赴いた以前の作である。當時の自分は幻滅と、苦笑と、倦怠と、および焦躁との中に醜く懊惱して居た。此集には唯だ自分の悔恨がある、毫末の自負も無い。

巴里に行つて自分は新生の喜びを知つた。自分は次いで巴里雑詠一卷を出すであらう。

よさの・ひろし

鴉と雨 完

鴉と雨 目次

自らを嗤ふ歌	(短歌貳百八十八首)……………	一
駱駝	(短歌八首)……………	九八
萩之家先生の例祭に	(短歌二十首)……………	一〇一
冬と飢	(短歌十八首)……………	一〇八
塩原の秋	(短歌二十五首)……………	一一五
砂	(短歌十一首)……………	一二四
灰の底より	(短歌四十一首)……………	一二八
倦怠四篇	(詩)……………	一四二
黒き聲	(詩)……………	一四七
支那街の一夜	(詩)……………	一五〇
小曲六篇	(詩)……………	一五三



乞食	(詩)	一六〇
駿河台の夕	(詩)	一六八
正月	(詩)	一七三
應接室	(詩)	一七八
煙草	(詩)	一八二
星	(詩)	一八九
冬のうしろ姿	(詩)	一九三
春の鳥	(詩)	一九九
誠之助の死	(詩)	二〇二
小曲七篇	(詩)	二〇六
雨	(詩)	二一四
妄動五篇	(詩)	二一九

大正四年七月二十八日印刷
大正四年八月一日發行

東京市麴町區中六番町十番地
著者兼發行者印刷者與謝野寬

東京市麴町區中六番町十番地

發行所 東京新詩社
(振替口座七貳四壹)

東京市神田區表神保町三番地

發賣所 東京堂
(振替口座二七〇)

定 價 金 壹 圓
著 作 權 所 有

鴉と雨 誤植訂正

頁 誤 正

四七 降り 降り

七一 築士 築士

一一三 なみに にみな

一二三 大野 大野

一四二 獨心者 獨身者

一七八 沿 浴

二〇〇 四疊半 四疊半

(漢語口述二十〇)

東京堂

